

「トヤマエビ(下)」 制限される放流時期

脱皮時に共食いで数激減

富山県の海域で初めてトヤマエビの種苗放流が実施されたのは昭和60年のこと。日本栽培漁業協会小浜事業所が生産した2万6,000尾だった。平成8年からは、県水産試験場でもトヤマエビの種苗生産を始め、平成12年には日本栽培漁業協会分とあわせて約100万尾を放流した。

トヤマエビは水深150m以上の深海に生息するエビのため、種苗は水深100～350mの海底付近に放流している。手順はこうだ。まず、陸上の水槽で飼育した種苗を船に搬入し放流海域まで輸送する。移動中の動きを抑えるため、水温を5℃以下に設定した水槽に、1水槽当たり10万尾程度収容する。

放流海域に到着すると、円筒形のアルミ製放流器内に海水氷を投入し、続いて種苗を収容する。船のウインチで放流器を持ち上げて、船尾からつり下げ、海底付近まで降ろす。最後に音波を発信し、放流器の底ふたを固定しているフックを外し、ようやく放流となる。装備の整った船と特殊な放流装置が必要となるため、県水産試験場の栽培漁業調査船「はやつき」のような船でなければ放流できない。

放流する時期も制限される。トヤマエビが冷水性のエビであるため、海の水温を考慮することが必要だ。表面から50m層付近の水温は、7～10月まで20℃以上になり、種苗が耐えることができる温度を上回ってしまう。このため、2、3月に生まれた幼生を6月まで飼育して放流するか、表面水温が15℃より低くなる12月以降に放流している。

トヤマエビの種苗は、6月では体長で約2cm、12月から2月では4～5cm、次年の5月には約6cmに成長するが、脱皮をするとき共食いされ、長く飼育すればするほど生き残る数が激減する。6月の放流では、最大約100万尾の放流を行っているが、種苗はまだ小さく自然界で生き残ることはなかなか困難である。一方、12月から2月の間の放流では、約5万尾が最大であり、大型の種苗を放流しているが数は6月に比べて激減する。

今後、種苗の生産効率と生き残りを考慮し、最も効果的な放流時期を探っていきたい。(野沢理哉)



海上でトヤマエビの稚エビを放流する様子